

牛と私の幸せな未来のために

富山県立中央農業高等学校 生物生産科 3年 松浦 日依梨

私は、乳牛のいない農業高校で学ぶ農業女子高生。何度もつまずき、戸惑い、悩みながらも思い描いた、私の理想の牧場。私は非農家で育ちました。非農家の私が酪農に興味を持ったきっかけは、中学の授業で酪農を知ったことです。大学時代に畜産を学んでいた母親が私に「牛って可愛いんだよ」と教えてくれていたこともあり、私は授業で白黒の牛の写真を見て可愛いなと見つめていました。そしてその日、私は「酪農」とは牛乳を絞る農業の一つであることを知りました。それを知った私は、この可愛い牛を仕事にできる「酪農」は最高の職業だと思いました。こんな軽い気持ちで酪農に興味を持ったきっかけでした。それからは酪農にみるみる興味を持ち始め、憧れも持ち始めていました。私はその興味や憧れを忘れられず、まずは牛のいる環境に行きたいと思い、富山県内で唯一牛のいる中央農業高校への進学することを決めました。私は中央農業高校に入学し、牛のいる環境に期待を寄せていました。しかしそれも束の間、念願の牛たちとの初めての實習は期待とは大きく外れていたのです。實習前に説明があり、いざ私が牛のいる牛房へと入ってみると、思った以上に牛は大きいし、牛たちは逃げ回るし、人にどついていて、可愛いと聞いていた牛はそこにはなく、私は戸惑いを隠しきれませんでした。初日の牛への恐怖が根強く、しばらくの間は實習前に友達と憂鬱だねと話し合うのが恒例になり、牛を心から可愛いとは思わなくなっていました。しかし、いつしか私は牛への扱いにも慣れ、牛の見せてくれる一つ一つの表情に気づくようになり、そんな牛を愛おしいと思うようになっていきました。牛に魅了されていった私は、酪農家への憧れが気づけば夢へと変わっていることに私は気づきました。牛のいる生活にやっと慣れ始めて、高校生活も残り半分となった二年生の九月。私は、クローバーファームで二週間のインターンシップをさせてもらえることになりました。私にとって初めての酪農ということで、緊張もありながらも、楽しみが抑えきれませんでした。期待の詰まった初日、私は気合を入れてクローバーファームの青沼さんの話を聞きメモを一生懸命にとりました。私は、育成牛と子牛の世話を青沼さんの奥さんと手分けして行ったのち、本業である搾乳をするという作業の流れを任せてもらうことになりました。育成牛と子牛の世話は学校でやっていることと基本的には変わらなかったため、ここまでは順調に終えることができました。しかし、そのあとの搾乳では、私が思っている以上に前絞りの作業やミルカーの装着にてこずり、大切な生乳を床に垂れ流し続けてしまいました。さらに、焦るあまり、装着のことしか考えられず牛たちに不快感を与えたり、ライナースリッパを起こしてしまったり牛たちのことを一番に考えてあげることができていませんでした。初日から一週間もたつと搾乳には慣れ、私は次の壁にぶつかっていました。それは、牛追いと

発情の見分けです。牛追いは見た目以上に簡単にはいかず、なかなか牛が思うように誘導出来ず、ミルクパーラーまでに連れて行くのに多くの時間を割きました。また、発情の兆候を発見することも出来ませんでした。青沼さんは、朝作業する前に、「今日発情きてる子いるよ」とヒントをくれたときがありました。私はスタンディングしている牛はいないか、外陰部が腫れている子はいないか、鳴きまくっている子はいないか注意深く観察していました。しかし、思いあたる牛は見つけられず、搾乳終盤に青沼さんは最後の牛を連れてきて「この子だよ、今からタネつけるから見てて」と。「この子さ、今日の朝の様子を見てたら、牛たちにちょっかいを出したり、必要以上に歩き回ったりして、他の牛が迷惑そうに避けてたんだよ。」と言ひ残し、人工授精の準備を始めました。私は、気づくことのできなかった自分にかっかりしました。私は、新たな壁を前に、搾乳さえできれば、和牛の飼育となんら変わりのない仕事だろうと思っていた頃の自分に、酪農を舐めすぎていると言ってやりたい気持ちでいっぱいでした。しかし、たった二週間のインターンシップではあったが、この研修での青沼さんとの出会いが私を大きく変え、酪農の夢を目指す始まりになりました。学校に戻り、和牛の飼育をする私は、牛の発情に意識をしたり牛への態度を変えたり、とにかく青沼さんの背中を思い出しながら、実習に取り組んでいました。そのうち、私はやっぱり牛が好きで和牛ではなく酪農がやりたい、搾乳を通して牛と会話したいと思うようになり、私は酪農家になると強く心に決めました。青沼さんをきっかけに、私は夢に向かって歩み始め、青沼さんの牧場をモデルに私の夢はどんどん広がり、具体性も出てきました。たった二週間体験しただけの酪農から、私が思い描いた理想の牧場とは。それは、「牛も人も幸せな牧場」です。言葉の通り、経営理念は牛も人も幸せな牧場を経営することです。私が考える牛の幸せとは、「自由であること」です。そのため、牛舎はルーズバーンで放牧もできるようにすることで、牛たちが本来の姿でのびのびと健康的に過ごすことができます。しかし、ルーズバーンにすることには自由で過ごすことのできるメリットの反面、牛同士のケンカや股さけなどで怪我をしたり、社会的序列により満遍なく餌を与えたりできないというデメリットがあります。しかし、私は牛たちが本来の姿で暮らすことにこだわりを持って経営したいと考えています。また、地域全体を仲良く持続的に発展させることにもこだわりたいと考えています。私の住む富山県の農業は稲作が中心です。私が富山の稲作農家さんと繋がることにより、飼料用米やWCSをもらい、私の牧場で出た牛糞を堆肥に変え富山の田畑に還元することにより、稲作農家さんは新たな収入を確保できます。そうすることで化学肥料に頼りすぎない環境に優しい農業、そして持続可能な「牛にも人にも環境にも優しい農業」の輪が広がり、幸せを共有できると考えています。さらに、酪農教育ファームの認定を受け、畜産および酪農の大切さを伝えるとともに、酪農の後継者育成にもつなげたいと考えています。どんどん夢が広がる一方で、今の私は酪農の世界に足をふみこんだだけで、酪農を専門的に学び始めた途中

段階です。そのため経営の基礎的知識もなく、私の理想とする牧場の将来設計も漠然としています。だから私は大学に進学し、酪農を広く深く学び、在学中には留学を考えています。日本にとどまらず世界に出て多くのことを学ぶことで「牛も人も幸せな牧場」の実現に近づきましょう。私の夢は今、スタートしたばかりです。この先、今まで以上に何度もつまずき、戸惑い悩み、逃げたくなることもあるとおもいます。ですが、今の私には夢に迷いはありません。これからの酪農を担う者として夢に向かって前進していきます。いつの日か、牛と笑って暮らせる未来のために。